

【第3回】 テキスト (目次)

自分を表現する最高の喜びを味わおう。

引き込まれる文章とは

納得性のあることから書き始める／意外性のあることから書き始める

文章にすることの意義

見直しの意義／考えが整理されてくる

推敲する大切さ

同じ考えからの脱却／新しい視点の獲得／問題点の整理

時間制限（締め切り）について

締め切りの不思議／集中力／まとめる力

読む人に対する親切

分りやすいこと／内容のレベルは無関係／独善的でないこと

テーマや題材の見つけ方

身の回りに無限にある／得意分野と不得意分野／楽しいこと

ト書きの使い方

「 」と『 』／「 」と()／「と言った」を使わない工夫

主題の見つけ方

テーマ選びの基本／メモ帳を持ち歩く／主題を温める／主題について調べる
／ウンチクとは

外来語の使いかた

カタカナでの表現／訳する意味／原語表記

執筆十戒

愛にもとる表現はないか／不明なことを断定していないかなど

エッセイの整形・統一

主題から外れていることは言わない／盛りだくさんにするのは問題

感動するエッセイとは

変容や驚きのあるもの／勇気や愛のあるもの／優しさや喜びのあるもの

たとえと比喻の大切さ

たとえとは／比喻とは

退屈な文章とは

書き手に心の動きが無い／既知のことでも退屈ではない

誠意のある説明とは

肯定形での説明／否定形で言い直す／疑問形の使い方

ペンネームの付け方

自分と同じ個性・違う個性

【第3回】 自分を表現する最高の喜びを味わおう。

人間がこの世に生まれてきて、何かを表現することができるというのは、素晴らしいことです。魂のままでは、何も表現できませんが、肉体があれば、ダンスをしたり、絵を描いたり、文章を書いたりして、自分を表現できます。

もちろん、肉体を使って、スポーツなどの表現することも素晴らしいのですが、人間は他の動物に比べて著しく頭脳が発達していますから、それを使って表現ができることは、とても人間らしいことだといえます。そして、その表現方法を創意工夫したり、心を込めて豊かに、美しくそれができることは、人間としての喜びです。楽しみです。

ものを書くのは、自分一人でも、充分楽しいのですが、それを誰かに伝えることができたり、共感してもらえるのは、さらに、さらに、その喜びが増します。そのようなことを思いながら、第3回目のテキストをスタートします。

【301】 引き込まれる文章とは

(納得性のあることから書き始める)

「祇園精舎の鐘の音、諸行無上の響きあり」で始まるのは、「平家物語」。「我輩は猫である。名前はまだ無い」から始まるのは、夏目漱石の名作「我輩は猫である」です。「トンネルを抜けると雪国だった。」は、川端康成の「雪国」ですね。

書き出しは、なかなか難しいものです。先人も巨匠もいろいろと工夫をしている様子が伺われます。この章は、この書き出しあたりの、読む人を引き込む文章について考えてみましょう。

エッセイは、人に読んでもらうことを前提にして書いているわけですから、せっかく最初の所が目に触れても、最後まで読んで貰わなければ、少し残念ですね。ですから、どんどん、先に進んでもらうために、読む興味を起こさせたり、高めたりしなければなりません。しかも、最初の、1～2プロット（段落）が勝負です。

この最初が面白いなと思うと、興味が沸いて、先に読み進みます。そして、中ほどまで進むと、「もう、ここまで、読んだのだから、ついでに最後まで読もう」という気になりますから、そこまで、引っ張れば大成功です。

逆に言うと、そこまで引っ張っておいて、本当に言いたいこととか、ちょっと難しいこととかを、その辺りから書けば、それは「頑張って」読んで貰えるということになります。

つまり、いきなり、難しい本題を冒頭に持ってきたのでは、拒否反応に会い易いということになります。入り口では、入りやすい、分かり易い、取っつきやすい内容から書き始めなければなりません。「このテーマは読みたい」と思う「内容」をいきなり冒頭から書いてもいいのですが、しかし、それは、まだ、読む準備の十分には整っていない読者にとってみれば、読みにくい、分かりにくいものに思える場合も多いです。

まずは、このエッセイはどんな雰囲気のものなのか、どんな言い回しなのか、どんな調子のもの

なのか、それを伝えなければなりません。
いわば、筆者から、読者への「挨拶」が必要なのです。

「こんにちは、今日は、良いお天気ですね」
という挨拶には、あまり「内容」はありませんが、「語調」「気分」「機嫌」「言葉のスピード」「明るさ」などなど、言葉を発した人の多くの情報を含んでいます。
「ああ、この人は今日は機嫌がいいのだな。幸せなのだな」ということまでも分かることもあります。

それと同じように、エッセイも最初の第一段落は、著者から読者への挨拶の意味がありますし、それがかなり重要だということです。
では、どのような「挨拶」が良いのかと言うことですが、どんな実生活でもそうであるように、「挨拶」は、穏やかで、親しみの持てるものが良いわけです。

さて、では、文章で言うところの、「穏やかで、親しみのもてるもの」とはいったい何でしょう。それは、逆から言えば、「反発を招かないもの」ですね。では、「反発」とは何でしょう。それは意見の違いですね。見解の相違。
例えば、「野球は巨人だ」と始めれば、巨人ファンでない人は、反発します。
同じように、「自民党はけしからん」と始めれば、自民党を応援している人は、必ず反発します。
「自民党は良いことを言っている」と始めれば、今度は、反自民党の人から反発を招きます。

つまり、どのような見解も、意見も、主張も、必ず、誰かが反発します。
ところが、

「自民党とは、自由民主党の略です。永田町に党本部があります」から始めると、「あっ、そう」とか「知ってる」とか、「それで？」とかの反応になりますが、すぐに「反発」にはなりません。

ですから、この書き始めは一応、「反発」を招かないという作戦は成功しています。それから、この文章は「ます。です調」なのだなということもわかりますね。語調を伝えると言う挨拶の一端が出来たわけです。

もう一例。
「私は薔薇が大好きです」とか、「私はどうも薔薇は嫌いだ」で始めると、「反発」の可能性があります。
「薔薇には、色々な種類があります」とか、「近所の庭に、薔薇の垣根がある」とかで始めると、「反発」は起りません。

つまり、このように、とりあえず、「語調」を確かめてもらって、「反発」も招かないで、数行読み進んでもらうための工夫が必要だというわけです。
そのためには、軽い「挨拶」をするということです。
「今日は、良い天気ですね」に反発する人はいません。

コツとしては、納得性のあることをまず、冒頭で言うということになります。事実だけを述べるといってもいいですね。
できれば、賛成意見が得られるものを書く方が、読む気がさらに起っていいのですが、賛成意見のあるようなものは、必ず反対意見もあるでしょうから、そのようなものは、文章の中ほど

の持って行って、まず、冒頭は、挨拶に徹するのがいいと思います。

具体的には、反対意見を挟む余地のないものを、まず、書くと言ってもいいですね。誰でも納得できる、納得性のあることを書く。可もなし、不可もなしということを書く。
何か気の効いたことを書こうとしないで、ありのままを書くと言ってもいいです。

この先どっちに転んで行くのか、先を読まなければ分からないということを書く。誰でも知っていることを、確認するためだけにかく。「私とあなたは、同じ常識の上でお話しましょう」というつもりで書く。

そのような気持ちで書かれた文章が冒頭にあると、読む人は安心して次に進めるのです。つまり、読み進む気持ちになると言うわけです。
ですから、結論を言えば、冒頭は、難しく考えないで、普通に書くのが一番良いということです。

「トンネルを抜けると、雪国だった。」これには、誰も反発できません。しかも、語調や、モノトーンの雪景色の情景まで広がってきます。とても上手な、「挨拶」だと思います。

(意外性のあることから書き始める)

冒頭は、ですから、誰も反発できないこと、常識的なことから書き始めるのが良いのですが、それではインパクトが少なく、読者を引っ張り込むことができない場合は、少しだけ、意外性のあることから書き始めるのも良い工夫になる場合があります。

しかし、意外性があるとしても、あくまで、「挨拶」「反発無し」という原則は守った方が良いでしょう。

例えば、

「三越の一階に、アゲハ蝶が一匹飛んでいた」

「スーパーの秋刀魚はどうして、みんな左向きなのだろうと思う」

「その日は、いつも通り慣れた地下鉄の駅を間違えてしまった」

『かあさん、かあさん』という子どもの声で目が覚めた」

など。

書き始めは、「挨拶」であって「反発無し」であることが大切ですが、もう少し工夫して、「それで、一体何がしたいのだろう。何が起ったのだろう」という興味を引くために、少しだけ「意外」なことを言うのも一つの工夫ですので、これも覚えておいてください。

ただし、エッセイの冒頭の書き方は、いろいろな工夫があると思いますが、これが正しくてこれはいけないということは、実は何もありません。

必ずしも、「挨拶」かつ「反発無し」でなければならないということも、実はありません。

一つの方法としては、そのようなこともあるかなと思います。が、あくまで、一つのヒントに過ぎません。エッセイは、自由です。書き方も、千も万もあります。ヒントにはするけれど、そうでなければならないと思っはけません。是非、自分で創意工夫してみてください。

【302】 文章にすることの意義

(見直しの意義)

文章に書くということは、前にもお話しましたが、自分の考えを客観的に眺められるというのが、最大の意義だろうと思います。

つまり、自分の考えを自分で見直すことが出来るということですが、これが実は、「頭」の中だけで作業していると、なかなか効率よくできないということでしたね。

それが。紙に書き出すと、自分の思考の見直しが効率よく出来るというわけです。

これは、「頭」の働きがそうになっているからです。「頭」は、例えば、録音テープのようなものです。あるいは、音楽 CD のようなものです。時系列に聞くことはできますが、止まると音が消えますし、逆転させて戻すと何を言っているのかわかりません。一方向に流れていく時に音があるだけです。

同じように、「頭」の中の「思考」は一方向、時間の経過にそって動いているときだけ、その時にだけ、存在します。止まっている思考はありません。止まっている音が無いのと同じです。ですから、それをチェックするのはとても難しいのですが、それを言葉にして紙に書くと、それができます。

まるで、音楽を楽譜に書くと、全体が見渡せて、そのチェックができるようなものです。

(考えが整理されてくる)

「時系列で流れる思考」を「頭」の中だけで整理するのは、大変な労力が必要ですが、紙に文字として表せば、整理は簡単になります。

また、「頭」の中では、堂々巡りは何度でも無意識にできてしまいましたが、紙に書いて考えを進めると、堂々巡りを何度も何度も、続けることは普通なかなかできません。堂々巡りをしていることを、すぐに自分で発見することができます。

そして、ダブった部分や、同じことの繰り返しは、次第に整理されていきますから、それに従って、自分の頭の中の考えも整理されていきます。

なにか、もやもやした考えがあって、自分でも何をどう考えていいのかわからなくなっているようなら、それをエッセイにする、しないに関わらず、とりあえず、紙に書き出してみると良いです。

おそらく、堂々巡りと、ダブりの部分が削ぎ落とされるだけで、中心となるポイントが、書く以前よりは、はっきり輪郭を現してきますので、考えやすくなると思います。とにかく、書くことが大切です。書き出すと、自分の考えは整理されます。

考えが、整理されると、「頭」は、「その考え」から抜けることができます。「考え」が文字になると、その考えをもう「頭」はする必要が無いと思うわけです。そして、対象を変えますから、すると、気分も変わりますし、また、新鮮な思考が始まりますので、アイデアや、感動も得やすくなります。これは、考えを紙に書き出して、整理した余得です。

【303】 推敲する大切さ

(同じ考えからの脱却)

ただし、書きっぱなしでは、せっかく紙に書いた意味が半分しかありません。推敲がとても大切です。

推敲と言うと、なんだか、文学的で難しいような気がしますが、一番大切な推敲作業とは、同じことを何度も言っていないかどうかをチェックするということです。

大切なことは、何度か言わなければなりません。言葉を変え、表現を変え、多面的に、立体的に表現して正確に伝える努力をしなければなりません。

しかし、そのことが、十分伝わったらな、それ以上、屋上屋を積み重ねて言い足すのは、今度は、「礼儀」に反します。同じことを何度も聞かされると退屈してきますし、それ以上聞かされると、うんざりしたりします。

ですから、適当なところで、切り上げなければなりません。

その匙加減が難しいと言え、難しいのですが、そこが推敲の意味のあるところでは。

また、この推敲を自分でしっかりしていると、「一体、自分の本当にいいたいことは何なのだ」ということが、本当にはっきりしてきます。

伝えたいポイント、言いたいポイントがはっきりしてくるわけです。

伝えたいポイントがはっきりしているから書くと言う場合もありますが、書いている内に、ポイントが見えてくると言うこともよくあることです。

(問題点の整理)

また、言いたいポイントが整理されて、はっきりしてくると、それらの問題点について、優先順位をつけることもできます。

また、整理が進んでくると、「それでは、どうする?」とか「問題は分かったが、改善策は?」などと、先を考えねばならないことが分かってきたり、さらに、そのためには、「本当の原因は、これこれこうではないだろうか」とか、「何々と関係があるかもしれない」などと、問題の周辺についても、考えが膨らんでいきます。

(新しい視点の獲得)

このように、問題が整理されることによって、さらに、新しい視点を得ることができたりします。物事を深く考える、物事を深く見つめる、物事を深く理解する、感動するということになってきます。

ですから、単に、「考える」のではなく、「文章に書く」ことは、意味があるということです。さらに、単に「文章に書く」だけではなく、「推敲する」ことが大切です。推敲すると、物事の新しい視点を得やすいのだといえます。

その訳は、簡単に言えば、推敲するときに、代替となる単語や言い回しを考えているわけですか

ら、その単語の先に、あるいは、その言い回しの先に、今まで見えてなかった事が見えてくると言うことがよくあるという仕組みです。

思えば、人間は、言葉を使って考えたり意志を伝えたりしてきましたが、それは、400万年のうち、399万5千年間は、たぶん、話し言葉だけでした。その後、今から約5000年前に、文字が発明されて、言葉を、石や、木や、紙に書くことが出来るようになりました。それから、人類の文明が飛躍的に発達したことを思えば、文字の発明というのは、画期的な大発明だったのでしょう。

その文字を縦横無尽に使いながら、人間は、自分の思考を調えることができますから、この発明は、人類の「考える力」をも飛躍的に向上させたのだと思います。

余談ですが、ですから、ものを書きながら、考えるのは、「頭」の使い方がとても、上手になっていくのだと思います。そして、「頭」を上手に使えば、「頭」は快適になってきますし、すると、自分自身も快適になっていくわけですから、ものをちゃんと書く作業というのは、自分の幸せにも非常に役に立つことなのだと思います。

【304】 時間制限（締め切り）について

(締め切りの不思議)

締め切りというのは、誰にでも嫌なものだと思いますが、作家とか、エッセイストとか、漫画家とか、とにかく、雑誌などの締め切りを抱えている人にはとても嫌な響きの言葉だと思います。締め切りを守れないと、出版社や読者に迷惑をかけることになりますから、これはプロなら必死で守らなければなりません。

ですから、「時には、締め切りがなくて、のんびり書きたいものだ」と思ったりしますが、しかし、よくよく観察してみると、締め切りが無かったら、いつまでも完成しないというのも、事実です。

これは、「締め切りが無いから、怠惰になっている」という場合もありますが、「締め切りがないから、いつまでも、あれこれ手を入れている」ということもあるようです。そして、結果として、書き入れなくても良いような蛇足を一杯書き込んで、いったい何がポイントか分からなくなってしまふ、ということもあります。

絵でもそうですが、完成した後に、あれこれ筆を後から入れるととんでもない失敗をしたりします。せっかく美しい色合いで、絶妙なバランスだったものものが、取り返しのつかない、駄作になってしまうということもよくあることです。

セザンヌの絵でも、まだ、キャンバスを塗り残した白い部分があるのに、それでもう、「完成」にしている絵もたくさんあります。なんだか描きかけのようなのですが、実はそうではありません。さすが、巨匠ですから、その辺りの機微をよく知っているのです。この絵は、この時点が一番美しい、これ以上手をいれると、この美しさは減るばかりだ。だから、この時点で「完成」としよう。ということなのです。

自信のない素人は、「まだ、塗り残した白い部分がある。きっと、まだ、塗ってないわよって思わ

れる。未完成だと思われる。それはイヤだ。だから、何か色を塗っておこう」と、せっかくその時点が一番美しい絵を、わざわざ詰まらない絵に変えてしまいます。蛇足です。

で、締め切りの話に戻りますが、この締め切りが、蛇足を防止するのに、とても、良い役目を果たしてくれているのです。

「まだ、あまり、書き込んでいないけど、もう、締め切りだから時間がない」という理由で、「蛇足」を書き込むことを防止できている場合が多いように、私は思います。

(集中力)

また、締め切りがあると、短時間にそのことに集中して書かなければなりません。その集中度を高める役目としても、この締め切りというのは、とても秀逸です。追い詰めれて、集中力が高まるので、余裕が無いといえ、そうかもしれませんが、とにかく、集中力は高まります。

それまでは、「周囲がうるさくて、集中できない」とか、「今日は体調が悪くて書く気がしない」とか、あれこれ言い訳を言っているけど、締め切りが近づくと、たとえ周囲がうるさくても、体調が悪くても、集中して書くことができます。

また、集中して書けば、なんとか書けるのだということが、分かってきたり、それが自信になってくると、次第に「集中すること」も上手になってきます。ですから、締め切りに追われて集中して仕事をすることは、自分の「集中力」の向上にもなっているということで、結局、大量の仕事がやってきても、短時間でこなせるようになるということなのだと思います。「締め切りが作家を育てる」と言った人がいますが、本当にそういう面もあると思います。

(まとめる力)

また、締め切りは、文章をまとめる力になることもあります。これは、先に述べた、整理する力と、集中する力の両方が働いて、まとめる力になるのでしょう。

前に、「字数制限」がある方が、文章がまとまると言いましたが、それとよく似ていますが、「時間制限」がある方が、無いより、文章がまとまるということです。

このエッセイ講座にも、締め切りがありますが、ご自分で自分のエッセイを書かれる場合も、「締め切りは、いついつ、字数はこれこれ」と制限を設けた方が、良い作品になる可能性が高いと思います。

制限の中で、最大工夫して表現することが大切なのです。

【305】 読む人に対する親切

(分りやすいこと)

読む人に対するサービスとして、一番大切なことは、「読みやすさ」ですが、それは結局、分かり易いということだと思います。

「何を言っているのか分からない」、「何が言いたいのか分からない」では書いている人と、読む人の間にコミュニケーションが取れません。

学校の国語のテストで、「問い①の『それ』は何を指していますか」などという問題があります。読解力がどの程度あるかを試す問題です。読解力があれば、途中に出てくる指示語の指し示す箇所がわかりますから、文章をよく理解できます。

しかし、読者の読解力を当てにして文章を書いてはいけません。

「たとえ指示語を多用しても、読者に読解力があれば『それ』が何を指しているのか分るはずだ。」と考えて文章を書いてはいけません。また、例えば、国語のテストで、正解率が例えば5割とか6割とかというような難解な文章を書いてはいけません。誰が読んでも正解率は、10割が望ましいです。

もし、何割かの人が正解できないような「指示語」なら、「指示語」にしないで、ちゃんとした名詞で書くべきです。それが親切ですし、マナーだと思います。

また、そのような文章なら、読者は安心して読めるというわけです。

(内容のレベルは無関係)

この「分り易さ」ということだけ言えば、それは、内容の難解度とは無関係です。というか、難しいことを伝えたいければ、伝えたいだけ、表現はさらに分り易いものにしなければなりません。

簡単なことは、簡単に言っても、難解な言い回しで言っても何とか伝わります。

しかし、難解なことは、難解に言うとはほとんど伝わりません。理解できません。難解なことほど、分り易い表現で言わなければならないということです。

(独善的でないこと)

あと、自分は「正しい」と信じていることを、「相手も正しいと信じているだろう」と憶測して書いてある文章は、一般には、理解できなくなります。

一言で言えば、独善的な文章は、誰もついて行けなくなるということです。

ですから、この独善的な文章になっていないかどうか、いつもチェックをしなければなりません。

具体的には、「私はこう思うけど、果たして、人もそう思うのだろうか」という視点をいつも持っていなければならないということです。

一見、自信の無い人のような感じに思えるかもしれませんが、そうではありません。自分の判断、考え、思い方が、自分だけの既成のプログラムに侵されていないかをチェックするということです。

それらの、思い込みのプログラムが無い状態で、なるべく、物事を観察したり、判断したり、考えたり、感動したりしようということです。そして、それをそのまま書くということです。それなら、相手にちゃんと伝わります。

もし、どうしても、自分の中の思い込みのプログラムを経て、なにかを感じたり、思ったりしたことを表現するのなら、それなりの、説明も一緒に書き込まなければならないのだと思います。

例えば、「実は、私は小さいときから、なぜか〇〇が苦手ですて・・・」などと説明して始めれば、読むほうも安心します。

【306】 テーマや題材の見つけ方

(身の回りに無限にある)

掘り下げれば、身の回りに、テーマは無限にあります。いざ書こうと思うと、一生懸命探してもなかなか見つからなかったりしますね。

また、同じことを見たり聞いたりしても、個人個人で、見方や感じかたが違います。それが個性ですが、その個性をさらに際立たせると、あるいは人と違った見方や、考え方が出来る可能性もあるわけです。

では、どのようにしたら、いわゆる、一般的な見方ではなくて、とても個性的な見方ができるのかというと、それは、まず、一般的な見方を止めてみるということです。すると、自然に、個性的な見方が出来るようになります。

個性的な見方というのは、とても、特異な見方ではなくて、単に「一般的な見方では無い」ということです。

では、「一般的な見方」とは、具体的にどんな見方なのかというと、それは、マインドの特性を一般的に発揮した見方ということです。

つまり、一言で言えば、「欲」から物事を見た見方ですね。この見方で物事を見ると、それは常識的な、普通の、一般的な見方になります。

ですから、これをやめれば、たちまち、「一般的ではない見方」になります。その視点を得られません。とても、ユニークな得難い見方があるのではなく、「一般的な見方」をやめれば、たちまちにユニークな見方になるわけです。それほど、私達のマインドは、普通、「欲」からしか物事を見ていないともいえます。

ですから、「欲」からでない見方をすれば、日常にエッセイのテーマはそれこそ、無限にあるといえます。たまねぎ一つでもエッセイは書けます。窓のカーテンだけでも書けます。電話でも、カメラでも。挨拶一つでも、なんでも書けます。是非、自分の見方を変えるという工夫をしてみてください。

でも難しいと思ってしまうですね。本当は、全然難しくないのですが、どうやれば「欲」のない見方ができるのか、具体的に良くわかりませんね。言葉で言えば「欲」からは見ないで、「欲の無い」目で見るだけのことですが。

具体的にはこうします。

最初は難しいかもしれませんが、例えば、一旦、何らかの感想を持ったことについて、もう一度、「欲無し」ではどうなるか、再チェックしてみるということです。それを、ゆっくり、再確認するということです。すると良い練習になります。

例えば、雑誌の写真を見て、「ああ、このように海外旅行したいなあ」と思ったら、それを再度「欲無し」で見えます。つまり、「ゆっくり」と。

きっと違ったものが見えてきます。「現地の人みんな長袖？ もうこの時期は寒いのかしら」とか、「後ろのワゴンの果物は、アプリコットね」などと。

あるいは、「いつも、忙しいときに、電話かけてきて、困ってしまう」と思っても、それを再度「欲無し」で見えます。つまり「ゆっくり」と反芻してみます。すると、「あっ、そうか、ちょうど私は、暇になって、だから、まとまった仕事を始めようとしたときに電話をかけてくるんだから、きっと、そうなんだ。今、暇だろうって一応考えてくれているんだ。そして、まあ、当たってるともいえるわけだ」と別の見方をしてみます。

なぜ、ゆっくりすると、「欲」が落ちるのかというと、それは、欲の特性が「急ぐために機能するようにプログラム化された解釈」だからです。

もう少し説明します。

人間は、どんなことでも最初はゆっくりですが、段々早くできるようになります。行動だけでなく、理解や、判断や、推察などもそうなります。それは、学習したことをプログラム化して、同じようなことは、そのプログラムに任せて、大方の日常の思考は、そのプロセスを進むようにしているからです。

成長のためには、なくてはならない仕組みですが、しかし、このプログラムに任せる方法では、確かに、行動や、物事の判断を早くしたりすることはできますが、いつもと違った考え方が出来にくくなってくるわけです。

考えや行動や、感動までも、パターン化してきているわけです。それでは、個性的な見方や感じかたは、なかなかできません。ですから、そのプログラムを起動させないようにして、改めて日常を見渡してみようということをするればよいわけです。つまり、元に戻って「ゆっくり」です。

プログラムが無意識で起動して、マインドがそのプログラムに沿って走ることは、すなわち、「欲」であるわけですから、そのプログラムを走らせなければ、「欲」を無くした状態で物事が見えるということになります。

では、そのプログラムというのは、どんなときに走り易いのかといえば、それは、急いでいるとき、早くしたいとき、時間に追われている時です。その時、すばやく判断したり、行動するために作られたものですから、そのような状態では、必ず、出現して活躍してしまいます。これをやめるには、「急がない」ことです。ゆっくりすることです。時間はいくらでも有ると思うことです。

もちろん、この手のプログラムを起動させない方法は、欲の四要素「得たい」「保ちたい」「比較したい」「もっともっと」やそれらの組み合わせでその防止方法は、いろいろありますが、一番簡単なのは、「急がないこと」です。

また、急がないことを、具体的に実践しようとする時、「ふーっ」と一つ深呼吸（腹式呼吸）をして、意識をゆったりさせることから始めると良いでしょう。そして、ゆっくりした呼吸のまま、再チェックしてみるということです。

すると、見方を変えるのは割と簡単なことだとわかってくると思います。これは練習をしなければできませんが、練習すれば出来るようになります。

そして練習が進むと、日常に、エッセイのテーマが満ち溢れていると思えるようになってくると思います。

(得意分野と不得意分)

エッセイは、テーマとして与えられれば、得意分野であろうと、不得意分野であろうと、書かなければならないこともあります。

ただ、自分でテーマを探す場合は、得意分野で探す方がずっと楽です。アウトドアが好きなら、アウトドアの何かをテーマにすれば、面白いようにどんどん筆は進みます。料理が好きなら、料理のことを書くと、あまり悩まずに文章が浮かんでくるでしょう。

自分の趣味や、得意なこと、よく勉強していることなどからテーマを探すのが良いことだと思います。また、楽しく書けると思います。

(楽しいこと)

また、テーマ探しの、別の方法として、「楽しいこと」を探すと言うのがあります。楽しいことは、自分で一人で考えていても楽しいわけですから、その良い気分がエッセイに反映され易いです。テーマも見つけやすいですし、なんといっても楽しく書けます。

逆に、つらいことや、悲しいことは、あまり、筆が進みません。書いても構いませんが、それで、読む人に何か良いことや、楽しい感じを与えられるかということになると、それは、なかなか難しいですね。

つらいことを乗り越えて、ハッピーエンドになった話とかは、前半に一部つらい部分があっても良いでしょうが、つらいままで終わってしまったら、エッセイとしては、読み辛いですね。特に、恨みや妬みなどは、いけません。読んでいるほうも気分が悪くなります。

新聞やニュースや雑誌には悲しいことや嫌なことが一杯載っています。ですから、わざわざ、自分で書くエッセイにそのような、悪い雰囲気を持つてくることはないと思います。そのような暗くて不安なことは、新聞や雑誌で十分だと思います。

自分で書くエッセイは、なるべく、明るいこと、楽しいこと、ポジティブなことを書きましょう。

【307】 ト書きの使い方

(「 」と『 』)

ト書きと言うのがあります。括弧でくくって、普通は、話し言葉を書きます。

「」は、普通の話し言葉です。

『』は、その話し言葉の中のまた、引用です。

例：「あの人は、『あっ、それはどうも』とだけ言って、黙ってしまいましたけど・・・」と彼女はちょっと首を傾げた。

などと、使います。

また、括弧は、話し言葉だけでなく、何かを強調したいときにも使います。

例：やっぱり、重要なのは「愛」だと思います。

などと、使います。

また、変わった使い方として、

「それって、どういうことなんですか？」

「・・・・・・・・」

「あっ、そうか」

などと、「・・・」と書くことによって、少しの間、黙っている状態を表したりします。

彼は黙っていた。というより、臨場感がある場合もありますね。

工夫してみてください。

(「 」と())

括弧の中に、()を入れると、それは、黙って心の中で思った内容になります。

例：「いえ、大丈夫です。(まったく、もう、いつもこうなんだから!)」

などと、使います。

(と、言ったを使わない工夫)

括弧を使うと、普通には、「あれこれ、うんぬん」と言った。と言う風に、「と、言った」がその後につきます。

しかし、こればかりを繰り返していると芸が在りませんので、「と、言った」の代わりにそれを表現してみましょう。

「なになに」と言った。

「なになに」と囁いた。

「なになに」とつぶやいた。

「なになに」と叫んだ。

「なになに」と唸った。

など、「言う」ということをもう少し詳しく言い換える方法が、まず、あります。

次は、

「なにになに」と頷いた。

みたいに、

「なにになに」と言って、頷いた。

というところを、「言って」を省略した形があります。

もう少し例をあげれば、

「なにになに」と目を伏せた。

「なにになに」と涙ぐんだ。

「なにになに」とうなだれた。

「なにになに」と顔を輝かせた。

「なにになに」と飛び上がって喜んだ。

などと、応用できます。

さらに、それも省略することもできます。

「そういうことか」 気がつけば辺りは薄暗くなっていた。

とか、

「えっ、なんだって」 事件はそこから始まった。

とか。

テンポや状況を勘案して、いろいろな言い方がありますので、工夫してみてください。

【308】 主題の見つけ方

(テーマ選びの基本)

本を一冊書く場合は、その本全体が一つのテーマを持っています。そして、各章や、各項もそれぞれにテーマを持っています。短いエッセイは、その各項にあたりますから、それは、大きなテーマから、細分化された一つのテーマになります。

このように、大きなテーマを決めて、それを構成するように小さなテーマをいくつも集めていく方法もあります。

逆に、あまり大きなテーマを決めないで、どんどん気の向くままに書き進んで、それらを束ねてみると、一つのテーマが浮かび上がってくるという書き方もあります。ただしこの方法ですと、各エッセイの出来上がりが割りと似たものになる可能性が多いです。

つまり、同じテーマに偏重したりしがちで、改めて、不足している方面の文章を全体構成を安定させるために、書き足さなければならなくなることもあります。

本を作る場合、どちらの方法で始めるのが良いのかは、その時々ですが、短時間で作成しようとする、前者の方が能率的ですね。

さて、一冊の本ではなくて、一遍のエッセイを書く場合は、全体のことを考えることはありませんから、その意味では楽ですが、実は、その方が、選択肢が多くなって苦勞するというこゝもあ

りますね。自由度が高い方が、苦労は多くなるということです。テーマをどれにしようか、あれこれ迷ってばかりになるということです。

文章を書いたり推敲したりする時間より、このテーマを何にするかと言うことの方に時間がかかったりします。

(メモ帳を持ち歩く)

そこで、日ごろからテーマを貯めておくということをお勧めします。何かを思ったり、感じたりしたら、その場で一遍のエッセイは書けませんが、時間があれば、文章に綴って一遍のエッセイにできるかもしれないと思えるようなことは、手帳とか、メモとかに、簡単に書いて、記録しておきます。

「人間はあまり待たされると、腹が立ってくる」とか、
「シソには良く見ると産毛みたいな毛がある」とか、
「間違いで、他の人にありがとうと言っても、その相手は喜ぶ」とか。
なにか、面白いことや気付いたことをメモしておきます。

いざ、テーマを決めようとしたときに、直接的に役に立つこともありますし、間接的に役に立つこともあります。

また、そのように、気付いたことをメモしておくという習慣をつけると、いろいろなことに対して、しだいに観察眼が磨かれてきます。それがまた、エッセイを書く上で役に立ちます。ですから、気付いたことをメモするというのを、覚えておいてください。

ちなみに、私は、小さな手帳をいつも持ち歩いて、気付きを書くようにしています。何年か前から、小型の細い鉛筆が手帳の背のところに差し込めるものを使っています。その訳は、紙はあっても、筆記用具が無いと言うことが多いので、筆記用具と紙がいつも一緒のものを選んでいくわけです。また、手帳についている鉛筆だと、時々削らなければならないので、細いボールペンを鉛筆の変わりに挿して使っています。

(主題を温める)

主題を温めるというのは、その主題について、心の中であれこれ考える、考えを膨らませるということですが、その方法が二つあります。一つは、その主題について文章を書かないで、いろいろ思いをめぐらす方法です。関連するものを読んだり調べたりするのもその含まれます。書く前の段階ですね。

もう一つは、これは、忘れがちな温め方の方法ですが、その主題について、一旦文章を書いてみて、その文章をもとに、あれこれ思いながら、生活してみるということです。

普通、第一の方法で、十分主題が温まったら、そして熟したら、文章を書こうと思いますが、それももちろん良い方法なのですが、実は、もっと、マインドがよく働いてくれる方法もあるので。それは、第二の方法。とりあえず、一旦、その主題について、その字数くらいで、一つ書いてみるということです。

習作ですね。習作を作ってみる。

すると、もっと調べたいことや、自分でも強引な言い方だなあと思えるようなことなどが、いろいろ、分ってきます。

その状態で、心の中で、主題を膨らませたり深めたりできます。その方が、効率が良いようです。

ただし、習作にこだわっていたり、もったいないと思ったりするとそれから抜けられなくなりま
すから、「これは、デッサンだ」くらいの軽い気持ちで書いて、そして、「捨てる構わない」くら
いに軽く考えることが大切です。

その状態の作品を持ち歩く。「頭」の中でもそうですが、実際に紙に書いたものを持ち歩く。そし
て、電車を待つ間とか、ちょっとした時間にさっと、何度も読んでみる。つまり、「頭」をそのエ
ッセイに浸けておく。すると、不思議ですが、駅のアナウンサーの言葉の中にも、「あっ、これ、
使える」と思うものがあつたりします。「頭」がそのエッセイに浸っていますから、そのエッセイ
に必要なものはどんどん吸収したり、気付いたりするという状態になります。

ですから、主題を温めたり、膨らませたりするのは、机に向かって「頭」のなかでうんうん考え
るだけではなくて、街に、それを持ち出して、そのエッセイの目で、世の中を見たり、情報を仕
入れたりするという意味がありますので、是非、やってみてください。

(主題について調べる)

テーマについて、「知識」が、欲しい場合は、辞書や、辞典などで調べましょう。

最近では、インターネットなどで、簡単に検索できますから、便利ですね。でも、インターネット
の情報は、間違いや精度の低いものもありますから、注意しましょう。

(ウンチクとは)

いろいろ調べて、知識が増えても、しかし、知識ばかりになってしまったエッセイは面白くあり
ません。誰も知らないようなことがあれば、それを、書きたくなりますが、前にも言いましたが、
ウンチクが多いと、それは良いエッセイにはなりません。知識の受け売りはあまり魅力がないと
いうことです。

【309】 外来語の使いかた

(カタカナでの表現)

最近では、科学技術の発達などにもなって、外来語も多くなってきました。しかし、考えてみる
と、英語もフランス語も外来語ですが、漢字も、中国の言葉ですから、外来語ですね。いずれに
しても、外来語が多くなり過ぎると読みにくくなります。

同じ意味の日本語があれば、なるべくそれを使った方が良いでしょう。しかし、そのエッセイの全
体の雰囲気やバランスなものもありますし、また、ものによっては、外来語の方が一般的なものも
ありますから、一概に、こうあるべきだとはいえません。

結局は、ケースバイケースだと思います。

(訳する意味)

余り一般的でない外来語をカタカナで書く場合は、括弧をつけて、日本語訳も付記しておくのが、親切ですね。そのカタカナの部分が分からなかったら、そのエッセイ全体が分からないというのでは、困りますから。

(原語表記)

また、カタカナだけでは、もとのスペルが分からなくて、英和辞書も引けないということもありますから、あまり一般的でない言葉については、原語表記も付記しておくのが親切で良いと思います。

【310】 執筆十戒

(愛にもとる表現はないか)

エッセイを書く上で、自分としてこれは守ろう、守るべきだということを、ずいぶん以前から、私は、執筆十戒としてまとめて、カードに書いていつでも見れるようにしています。そして、できあがった作品をもう一度、その十戒に照らし合わせて、守られていない項目はないかと、チェックするようにしています。

それをお教えします。参考にしてください。

『宝彩有菜の執筆十戒』

- 1 愛にもとる言い回しはないか？ (与えているか？)
- 2 分かりやすく言っているか？
- 3 出来ないことを言っていないか？ (救いのないことを言っていないか？)
- 4 読む人に関係ないことを言っていないか？
- 5 難しい言葉使いをしていないか？
- 6 分かりにくいときは適切な例えを使っているか？
- 7 威張っていないか？
- 8 不明な事を断定していないか？
- 9 同じことをくどくど説明していないか？
- 10 読んで元気が出るか？

1から10までありますが、どれも、常識的なことですね。でも、それをつい忘れやすいので、カードに書いて手元に置いているわけです。

(不明なことを断定していないかなど)

3番の「出来ないことを言っていないか？」というのは、忘れやすいですね。そして、これをクリアするのは、なかなか難しいです。

たとえば、「勇気があれば、前進できます」と書けば、それは、文章的には間違っていないかもしれませんが、しかし、どうやって勇気が出せるのか、今現在、勇気が出なくなって困っている人に、そういった意味がないわけです。「勇気はこうやれば得られます」ということを具体的に追加して言わないと、いけません。

また、8番の「不明な事を断定していないか？」と言うのも、注意が必要です。自分ではよく分からないことを、分かったようにいうのはもちろんいけませんが、よく分かっていることを分からないように言うのも同じようにいけません。威張ってはいけませんし、威張った風に見られては困ると思いきるのもいけないということです。

淡々と、ありのままに行くということ。知らないことは知らない。知っていることは知っている。そのまま、ありのまま、でいくということが大切です。

【311】 エッセイの整形・統一

(主題から外れていることは言わない)

宝彩有菜の執筆十戒の中にもありましたが、「読む人に関係ないことを言っていないか」と同じことですが、「主題から外れていることは書かない」ことです。

と簡単に言っても中には微妙なものもあります。
例えば、「この文章は、主題とは少しはずれているけど、これがあるから、次の文章に続くのだから、まあ意味があるのだろう」と思うような場合です。

その時に、チェックの仕方として、「では実際自分はその文章で何が言いたいのか」ということを調べてみてください。また、その文章をまったく削除した場合どんな感じになるのか、それを確かめてみてください。

おそらく、「主題から外れたこと」あるいは、「外れているかもしれないこと」を削除してみると、文章がとても良い方向に変化すると思います。逆に言うと、読みにくい文章、一体何が言いたいのか分からないような文章は、主題から外れているセンテンスが多いのだと言えます。

人間は、考える時に「連想」を駆使して考えていきます。その連想の仕方は、各人各様です。ですから、著者が、このくらいの脇道に入ることは、まあ、いいだろうと思っけていても、読む人によっては、まったく別の方向に向いてしまうこともあるわけです。

ですから、なるべく、他の方向の行くことは防がなければなりません。つまり、本題から外れたことはなるべく言わないということが大切になってくるわけです。

(盛りだくさんにするのは問題)

また、同じようなことですが、良いことが盛りだくさんだと、結局何が言いたいのか分からなくなってきました。同じテーマを沢山の例で説明するのは良いことですが、違うテーマを同じエッセイに沢山の盛り込むのは混乱します。

もし、言いたいことが、2つあって、それぞれそんなに字数が必要ない場合でも、一つにまとめて言うより、別々の短いエッセイを2つ書く方が良いと思います。

【312】 感動するエッセイとは

(変容や驚きのあるもの)

感動するエッセイを書きたいと思いますが、しかし、人を感動させるのはなかなか簡単ではありませんね。無理に感動させようとすると、返って白けたりします。

ですから、はじめから感動させようと思わない方が良いです。それよりは、自分が感動したことをそのまま書けば、それは共感を得られやすいです。

その中で、自分の「変容」とか、「気づき」は、長い人生の転換などと一緒に起こりますから、感動の量も多いですね。共感も多いです。

例えば、「今まで許せなかった人を許したら、湿疹が治りました」みたいな話は、「ほーっ」と思ってしまう。それは、やはり、人生という長い時間が、そこに凝縮されているからだと思います。

(勇気や愛のあるもの)

「勇気」や「愛」に関係あるものも、感動的ですね。「勇気」も「愛」も「欲」が無い状態のことですから、そのような状態が起こったことは、人間は誰でもいつでも感動するのだと思います。

「人」対「人」の愛でもそうですが、「人」対「動物」の愛でも、充分感動が起こりますね。

(優しさや喜びのあるもの)

それから、「優しさ」とか「喜び」に関係するものも、しみじみとした感動を呼びやすいですね。そのようなものを誰でも「読みたい」ですし、そのような感情になりたいと思っているからです。しかし、それを上手に表現するのは、やはり、そんなに簡単ではありませんね。勉強や練習が必要ですし、自分がその優しさの中にいなければ、なかなか書けませんね。

例えば、イライラと立腹した状態では、誰だって優しい文章は書けませんからね。

余談ですが、そのような場合は、先ずイライラしていることを正確に書き出して見ることです。すると、それを冷静に眺めて見ることが出来ますので、例えば「まあ、いいかあ」になりやすいですし、そうすると、イライラも解消されやすいでしょうね。

【313】 たとえと比喻の大切さ

(たとえとは)

たとえと比喩はよく似ています。違いを言えば、たとえば、このような例もある、このような例もあるということによって、本当に言いたいことを説明していることです。

【例】

これを長い棒でかき混ぜてください。
例えば、箸、とか、スプーンとか。

(比喩とは)

比喩は、似たような現象や仕組みを話すことによって、本当に言いたいことの理解を容易にしようとするものです。

【例】

喧嘩をしたあと、前にもまして仲が良くなるというのは、まるで、雨が降って地が固まるようなものです。

たとえにしても、比喩にしても、それが書いてあると、状況や仕組みがよりよくわかります。

「お金持ちが（金銭欲を持ったまま）悟るのは、それはほとんど不可能だ。難しい」

というよりは、

「お金持ちが（金銭欲を持ったまま）悟るのは、ラクダが針の穴を通るより難しい」（イエス）

と言った方が、どのくらい難しいのかよく理解できます。

また、なんとなく読み流していた文章が、例えば、比喩があると、その部分でイメージがわいたりしますから、意識を喚起させる意味もあると思います。とくに、イメージのわきにくい抽象的なことを書いている場合は、適度に、このたとえや、比喩を挿入することによって、「頭」の中で具体的なイメージを構築して話を先に進めるというのはとても有効だと思います。

さらに、例えば比喩が使っていると、読むほうは、「ああ、この部分は大切なんだな。だから、言い方を変えてもう一度説明してあるんだな」と無意識にしろ、そう思いますから、言いたい重要なポイントでは、それらを使うのは、その意味でもとても有効だと思います。

【314】 退屈な文章とは

(書き手に心の動きが無い)

「退屈」かそうでないかという違いは、文章にあるのではなくて、文章を読んだ人の心が、動くかどうかということですから、同じ文章でもある人は退屈でしょうし、ある人はとても面白いものかもしれません。

ですから、退屈な文章を書かないようにしましょうと言われても、それを実現するのは、そもそも無理な注文だといえます。

ですから、ここでは、「一般的なことで言えば」という但し書きが必要です。

一般的に言えば、「退屈しやすい文章」というのは、書き手の心の動きがあまりない文章だという

ことは、いえると思います。

しかし、事実を淡々と述べていくだけで、読んでいる人は、次第に興味を持って、とても、退屈などしてられないという気持ちになる読み物もありますから、この「心の動きが必要」というのも、絶対必要という意味ではありません。

(既知のことでも退屈ではない)

それでは、知らないことを知るということで、興味が沸くのでしょうか？

「知りたい」と思うのは、マインドの大きな特徴の一つですから、それを上手く利用する方法ももちろんあります。

多くの、推理小説は、謎を提出しておいて、それを解き明かしていくというものです。マインドは、「謎」が立つとそれを放っておけませんから、ついつい最後まで読んでしまうということになります。

しかし、既に知っていることでも、興味を引いたり、退屈しない文章にすることも可能です。その場合は、そのことを、別の角度から見たり、解釈したりする方法が有効です。「なるほど、そのような見方があったのか」という感想になります。

これも、しかし、良く考えてみると、「知らない見方」の提出ですから、その部分だけ言えば、「既知」ではないですね。

まったくの、「既知」で、しかも、退屈しないものというのは、「愛」とか「勇気」とか「大肯定」とか「許し」とか「気づき」とか、そのようなものですね。これは、なぜ、「既知」なのに、退屈しないかと言えば、これらの、事柄は、実は、「マインド」が不在の時に、「ハート」が実施していることですから、マインドは、「知って」いますが、すぐに「忘れて」しまうのですね。

そして、いつも、「忘れた」状態でマインドは生活していますから、これらを、読み始めると、いつも、新鮮に感じるわけです。

また、それらに関する本や映画は、かつて一度読んだり、鑑賞したりしたことがあっても、時間を経て、再度読んだり、鑑賞したりすると、また、新たな感動があったりします。

【315】 誠意のある説明とは

(肯定形での説明)

お釈迦様は、弟子に説教するのに、同じことを、3回話して聞かせたそうです。

「その理由は、一回目は、何か言ってるなあ、くらいにしか、君達は聞いていない。2回言うと、何か、大切なことを言っているらしいと分かる。3回言うと、初めて、その内容に聞き耳を立てる。そうではないかい。だから、私は、大切なことは、3回言うのだ」

確かに、同じことを3回言われれば、聞く方も聞くでしょうが、3回同じことを言うのなら、少しずつ言い方を変えた方がなお、良くわかると思います。お釈迦様もまったく同じには言わなかったと思います。例えば、肯定形、否定形、疑問形とかに変化させて言ったのだと思います。

まず、何かを、説明するのに、普通は肯定形で説明します。

例 A : 「これは、赤い薔薇です」

(否定形で言い直す)

つぎに、同じことを否定形で説明しておくとも良くわかります。

例 A :

① 「これは、赤い薔薇です」

② 「これは、青い薔薇ではありません。これは、赤いカーネーションでもありません」

(疑問形の使い方)

さらに、疑問形を付け加える方法もあります。

例 A :

① 「これは、赤い薔薇です」

② 「これは、青い薔薇ではありません。これは、赤いカーネーションでもありません」

③ 「みなさんは、いままで、青い薔薇を見たことがありますか？」

こうすると、次第に、作者の言いたいポイントが分ってきます。

【316】 ペンネームの付け方

(自分と同じ個性・違う個性)

自分の作品のスタイルが見えてきたら、ペンネームも考えてみましょう。

もちろん、作品のスタイルが将来変わるかもしれませんから、ペンネームはそれをそのまま表すものではありませんが、一応、スタイルに合っている方が、好ましいといえます。

ペンネームにすることによって、著者本人のプライバシーを守るという消極的な効用もありますが、作品を書く上での積極的な効用もあります。

例えば、自分の名前は、いろいろな「自分」が詰まっていますし、その自分を意識してはなかなか自由な文章が書けないと言う場合もあります。そのような場合もペンネームにすることによって、書く自由度を獲得できるという場合もあります。自分を抜けるとでも言った方が良いでしょう。

また、ペンネームを柔らかくすることによって、柔らかい文体を維持する意識を持つこともできますし、逆に、固そうなペンネームにして、そのような文体にすることもあるでしょう。その他、時代もの、推理もの、恋愛もの、などなど、作品の傾向にマッチしたペンネームをそれぞれ著者は工夫して付けているようです。

もちろん、本名で書くことも可能ですし、現在、作家として活躍されている人の中にも本名の方もいらっしゃいます。ですが、まあ、普通は、ペンネームを使うのが多いですね。

命名の方法ですが、子どもの命名をするのと同じで、なるべく字面の良いもの、響きの良いものの方が良いですね。

しかし、平凡な名前では、覚えにくいとか、個性的でないとかになりますから、子どもの命名とは、少し違う観点から、命名しなければなりませんね。

また、どんなペンネームもそうですが、命名した途端に大作家の雰囲気があるわけではありません。そのペンネームが有名になるにつれて、そのペンネームの価値が高くなって行くわけですから、逆に言うと、平凡なペンネームでも、業績が素晴らしければ、そのペンネームはそれなりに輝いてくるわけです。

ですから、あまり、難しく考えず、好きなペンネームをつけてください。

自分が気に入るペンネームというのが、一番だと思います。自分の本名がとても気に入っているのなら、本名でもいいですし、それに一字加えたり引いたりしただけでも、立派なペンネームになります。

まるっきり、新しく作るのより、簡単に気の効いたものができます。

また、最近では、姓と名を分けて書かずに、まるで商品の名前みたいな、しかも、カタカナのペンネームもあります。時代とともにペンネームの流行も変化していくようです。

流行は、しかし、戻りますから、古い感じのものが、新しく感じたりすることもあります。

ペンネームを決めるのに、特に決まりはありませんから、自由につけてください。ただし、すでに誰かがペンネームとして使っているものは、当然ですが、使ってはいけません。

最初のうちは、候補をいくつも持っていていいかもしれませんね。

このペンネームの時は、こんなエッセイを書く。このペンネームの時は、それとは別のこんな感じと使い分けてもいいかもしれません。

自分の本名は、おかしな事に、自分では決められませんが、ペンネームは自分で好きに決められます。新しい、素晴らしい自分をイメージして、自分で自分の名前を考えてつけるというのは、とても良いことです。是非、そうしてみてください。

そして、気に入れば、友人、知人にも、「ペンネームで呼んでください」と言うこともできます。

ペンネームで呼ばれると、新しい、まだ、真っ白で新鮮な自分になれたような気がしますよ。そして、その気分がとても良かったら、「ずっと、ペンネームで呼んでください」なんてことになるかもしれませんね。

第3回テキストおわり（宝彩有菜）

以上で、3回目のテキストを終わります。

【作品制作】

3回目は、文章の香りとか、テンポとか、文体について、工夫してみましょう。

第3回目の課題 「私の日常」、または、「自由課題」 (1200字以内)

自分の身の回りの人々や、出来事について、今度はなるべく客観的で、公平な、覚めたクリアーな視点で、さりげなく描写してみましょう。

自然にかもし出される可笑しさや、哀しさ、嬉しさというものも表現してみましょう。

(題名の例：)

「山田君という奴」

「おつりが多い？」

「携帯を携帯しない」

「お見舞いの花」

「車検の代車」

「犬の散歩道」

「コンビニのアルバイト」

「季節の野菜」

「新入社員のお昼」

「天気予報は当たらない」

など

それでは、第3回目の作品を楽しみにお待ちしております。

宝彩有菜

◆宝彩有菜の「エッセイ講座」のHP

<http://homepage3.nifty.com/hosai-pj/essay/memb-index.htm>

(C) All copyrights reserved Alina Hosai 2005